



ジョイセフ
JOICFP

世界の妊産婦と女性を守る

西日本豪雨災害 被災者支援 活動レポート



2018年7月 — 2019年12月



被災地の様子。左より愛媛県、岡山県、広島県

西日本豪雨災害 被災者支援 活動レポート



はじめに	3
------------	---

支援活動

① 被災した女性・母子への物資支援	4
② 助産師の活動(訪問活動・サロン)	5
③ ママグループと連携した活動	6
④ ママたちを元気にするイベント	8
⑤ I LADY.ピアアクティビスト養成研修ほか	10
⑥ 被災地のママへのアンケート	11
⑦ 被災地の経験共有会	12

将来の災害に備えて	14
-----------------	----

支援企業・団体一覧／収支報告	15
----------------------	----

はじめに

2018年7月に西日本を襲った豪雨は、広範囲にわたり河川の氾濫や浸水害、土砂災害を引き起こし、200人を超える命が奪われ、多くの方々が避難生活を強いられました。ジョイセフは、災害直後から、被災した女性と母子の状況把握に努め、個人や企業・団体に対して広く支援の呼びかけを開始しました。また、7月下旬には、特に大きな被害を受けた岡山県、広島県、愛媛県において初動調査を実施しました(※)。



写真は宇和島市吉田町での初動調査の際、有我さんご夫妻と生まれて3週間の赤ちゃん(2018年7月当時)。植村助産師(後方中央)の存在が心強いと語ってくれました。

平時より母子に寄り添い支援を行っている被災地域の助産師会と連携し、避難者数が多く、年間出生数から被災した母子が多いことが推測された岡山県倉敷市、広島県呉市、愛媛県大洲市・西予市・宇和島市を中心に、地域で活動する助産師、地域の母子支援NPO、被災した妊産婦や母子を対象に聞き取りを行う一方で、行政からの情報収集も行いました。

初動調査の結果、災害発生後の混乱が続く中、被災自治体は母子の安否や状況をまだ十分に把握できていないことが分かりました。しかし、保健師や助産師、母子支援NPOなどへの聞き取りから、被災した母子の多くは、避難所ではなく、在宅避難または親類・知人宅に身を寄せていることが確認できました。

一部の助産院では被災母子の受入支援サービスや産後ケアを行っていましたが、助産院へのアクセスが困難になったり、情報が行き渡っていなかったために十分に活用されていませんでした。その一方で、被災したママたちの相談に対応した助産師や母子支援NPOからの情報により、母子が安らげる場所や、被災した家の片付けをする際に一時的に子どもを預けられる託児施設などが必要とされていることが分かりました。

ママたちへの聞き取りからは、自分より子どもや家族の問題の解決を優先したり、また、地域全体が被災した中で自分はまだ被害が少なく恵まれていると考え、自分自身の不安や悩みがあっても我慢し相談しない傾向があり、ストレスと疲労を蓄積していることが分かりました。

災害により、大切な家族、住み慣れた家や車、家財道具を失い、必要な物資も不足する中で、それでもなお子どもや家族を守るために必死でがんばるママや、避難生活で我慢を強いられている女性に寄り添う支援を届けたい。この思いから、私たちは、東日本大震災や熊本地震での経験もふまえて、まず助産師の訪問活動への支援、ママたちが安らげ交流できる機会や場所の提供、子どもの遊び場や託児サービスへの支援から始めることにしました。

活動の実施にあたって多大なご協力をいただいた岡山県、広島県、愛媛県の助産師会と地域の母子支援NPO、各自治体および関係機関のみなさま、そしてご寄附や物資の寄贈を通じて活動を応援くださった支援者の皆さまに、あらためて感謝申し上げますとともに、2018年7月から2019年12月まで実施したジョイセフの活動内容を報告いたします。

ジョイセフ西日本豪雨被災者支援チーム

※初動調査は、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム(JPF)の助成を受けて実施しました。

被災した女性・母子への物資支援

愛媛県宇和島市「被災地スマイルプロジェクト」



(写真:被災地スマイルプロジェクトより)

地元のNPO「おかあさんといっしょ」の「赤ちゃん、子どもたち、家族を守るために、がんばり続けているママたちにスマイルを届けたい!」という願いから始まったイベントが、2018年8月12日に宇和島市のサブライムホールで開催されました。ジョイセフは被災地のママたちを応援するために、日頃からご支援いただいている企業の協力を得て、物資の提供を行いました。参加者の中には、被災後に子どもたちが不安がり、ママから離れないようになったりして、子どもたちもストレスを溜め込ん

でいることを話すママもいたそうです。物資を受け取ったママからは、助かった、癒やされたといった声も寄せられました。寄贈物資は、宇和島市吉田町を中心に被災地域の保育園などにも配付。おもちゃや遊び場シートは、被災した保育園に寄贈しました。岡山県と広島県においても、助産師会が実施したサロンや母子支援団体と連携した活動を通して物資を配付しました。

活動期間 2018年8月～2019年2月

活動目的 被災した女性や母子に必要な物資を届ける

対象地域 愛媛県、岡山県、広島県

支援対象 被災地の女性・母子

物資を受け取った人数

- ・被災地スマイルプロジェクト／約100人の女性・母子
- ・3県の被災地のママ／約420人

連携団体・機関

- ・宇和島市母子支援NPO「おかあさんといっしょ」
- ・呉市母子支援団体「子どもおたすけ隊」
- ・呉市母子支援団体「安浦こどもひろば たけちまる」
- ・岡山県助産師会
- ・企業

寄贈物資

(被災地スマイルプロジェクト) ウェットタオル、ウェットティッシュ、ボディシート、アルコール用消毒用品、おむつ、おしり拭き、ベビーフード、離乳食、赤ちゃん用飲料、お茶、スポーツ飲料、歯みがきシート、洗浄綿、虫除け、日焼け止め、デリケートゾーンケア用品、水のいらないシャンプー、トートバッグ、おもちゃ、遊び場シートほか
(その他寄贈物資) ハンドソープ、シャンプー、スキンケア製品、おくるみ、よだれかけ、ベビーオイルほか



(写真:物資を届けた宇和島のママたち)

助産師の活動(訪問活動・サロン)

西日本豪雨の被害が大きかった倉敷市真備町の3つの避難所(岡田小学校、菌小学校、二万小学校)で、岡山県助産師会が2018年7月26日より、毎週木曜日の18時～20時まで女性のためのカウンセリングブースを開設し、出張カウンセリングを開始。ジョイセフはこの活動を支援しました。7月26日から9月27日の期間に、3つの避難所を中心として26回開催されたこの訪問活動では、助産師が2人1組のチームとなり、避難所に交代で出張。多くの被災した妊産婦・母子は近隣に避難をし、日中は自宅の片付けなどで避難所には姿を見せません。しかし、夜には物資を受け取りに避難所に戻ることが多いため、カウンセリング活動を夜の時間に設定し実施しました。助産師が来ることで、離乳食や母乳のこと、赤ちゃんの発育状況など、不安に感じることにについて、専門家の立場で助言をしてもらえるのはとても安心できたようです。

また、岡山県助産師会は、被災地のママたちが集い、助産師に育児の不安や悩みについて相談できる場所づくりの取り組みとして、サロン活動を計4回行いました。参加したママたちは、お互いの近況を話したり、アロマハンドマッサージをしたり、助産師さんと話したり、ほっとする時間を提供することができました。最後に開催したサロン(被災ママ茶話会:2019年12月20日開催)では、集まったママたちから、災害を振り返り、将来へ向けた備えや課題、悩みについても聞きました。

活動期間

訪問活動／2018年7月～9月
サロン／2019年2月～12月

活動目的

現地助産師の活動をバックアップすることにより、被災妊産婦への支援を実施するとともに、母子が集う場所を作り、母子の育児等に関する不安を取り除く

対象地域 岡山県

支援対象

助産師とそのサービス対象である乳幼児を養育中の母親と妊婦

- ・訪問活動／母子19組を含む延べ108人の被災者
- ・サロン／サロンに参加した母子の人数 86人

連携団体・機関 岡山県助産師会



ママグループと連携した活動



豪雨災害が発生してから数カ月が過ぎると、生活再建の不安を抱えながらも必死でがんばってきたママの中には、心身ともに疲れ果て、産後うつ症状が現れたりする人がいます。育児に関する不安や悩みも高まり、ママの不安を感じ取った子どもたちも精神的に不安定になるなど、母子の心のケアサポートの必要性がますます高くなってきていました。

このような母子への支援として、被災地の母子支援団体と連携し、ママ同士が被災の経験や悩みを共有することにより、つらい気持ちを和らげ、ママ同士、またママと助産師がつながり、そのつながりを深めることを目的に、母と子の癒し交流サロンを開催しました。愛媛県宇和島市、広島県呉市で、マッサージなどの癒しの専門家や助産師の協力も得て計23回の活動を実施、延べ479人の母子が参加しました。

活動期間 2018年9月～12月

活動目的 ママ同士が被災の経験や悩みを共有することにより辛い気持ちを和らげ、ママ同士、またママと助産師がつながる場づくりの支援を行う

対象地域 愛媛県、広島県

支援対象 被災地の母子

連携団体・機関

- ・宇和島市母子支援NPO「おかあさんといっしょ」
- ・呉市母子支援団体「子どもおたすけ隊」
- ・呉市母子支援団体「安浦こどもひろば たけちまる」
- ・愛媛助産師会
- ・広島県助産師会



「子どもおたすけ隊」 山本さなえさんからのメッセージ (一部抜粋)



どこからが被災者か、悩む女性たち

私たちの活動場所である呉市天応地区は、子どもの数はあまり多くはありません。被災後17日目に一人の女の子を預かる活動から始まった「子どもおたすけ隊」の活動ですが、親子の様子は分かりにくく、天応に子どもはいるの？と思うほどでした。ぼつぼつ集まり始めた利用者に支援物資を勧めても「私ももっと被害を受けた方に差し上げてください」と誰もが口をそろえて辞退されます。困りごとを聞いても言葉数も少なく、困っていないのかと思っています、他の方から「床上浸水で…」などの情報が入りびくりすることも多くありました。被災地に入って初めて、現地の方が思いがけない被害に混乱し、自分も被災しているのに周囲の人みんなが困っているからと自分のことを言い出せない、どこからが被災者なのか、自分は該当するのかも分からない何とも言えない精神状態になっていることが分かりました。それからは私たちも毎日顔を合わせ、「皆さんの気持ちだから、あなたに受け取って欲しい。」と物資を勧め、何気ない会話を重ねる中でやっと「あの時はこうだった。」「子どものこんなことが心配」と心の内を聞かせてもらうことができました。もちろん時間が経ち、家の片付け等も一段落しほっとしたから話せることもあるのですが、被災した人から「被害のなかった人には分かってもらえない」との言葉も多数聞きました。

災害支援と子育て支援の 垣根を取る

日頃から子育てに関わっている組織・団体が、災害後の母子のための拠点づくりを担い、責任を持って行うという意識が当たり前になればよいと思います。今はまだ災害支援と子育て支援は別物という意識があるかもしれませんが、「親子の今ある課題を支援する」と考えれば、災害時に柔軟に対応することは必須だと思いますし、何より物資、ボランティア、行政をはじめ他組織とのつながりがある強みがあります。「災害時に子どものことはずっと後回しになるのが現状。行政では手が足りない部分を企業が担う。」と動いている方も出会いました。今後でもできれば子育て親子の傍で寄り添いながら、一緒に「親子や地域にちょっといいこと」をできればよいと思います。その中で今回の経験をふまえ「いざという時」の災害への備えや体制作りのお手伝いをし、次の世代につなげていければ嬉しいです。

愛媛県宇和島市：母と子の癒し交流サロン

(連携団体：宇和島市母子支援NPO「おかあさんといっしょ」)

サロンでは、愛媛助産師会の協力による助産師の派遣を得て、母乳、卒乳、産後うつ、治療が必要で入院していた新生児の退院後の不安など、お母さんたちの悩みに耳を傾け、相談にのっていただきました。加えてマッサージなど、専門家の協力もいただき、多彩な活動を実施しました。

また、ティータイムには、ママたちが自身の被災の経験について、被災の困難、被災しなかった罪悪感など、それぞれ異なる被災の状況と影響について経験を共有しました。当日初めて知り合ったママたちもいましたが、サロンが交流の機会となり、ママ同士の新しいつながりも生まれ、みなさん笑顔で無事に終えることができました。

活動実績

- ・ 第1回(2018年9月10日) 宇和島市吉田町喜佐方地区／母子17名参加
- ・ 第2回(2018年9月16日) // 三間町／母子7名参加
- ・ 第3回(2018年9月23日) // 吉田町玉津地区／母子13名参加



広島県呉市：母と子の癒し交流サロン

(連携団体：呉市母子支援団体「子どもおすけ隊」、「安浦こどもひろば たけちまる」)



被害が大きかった広島県呉市の天応・安浦地区では、保健師による育児相談やママたちによる子育てサークルなど、母子を対象とした活動が行われていましたが、災害発生後に避難所やその活動場所自体が被災し、活動が休止していました。このような背景のなか、被災直後に母子が集まれる場所を確保するため、個人が立ち上げた託児所兼遊び場のスペースを継続して運営し、母子が安心して過ごせて遊べる場所を提供するための支援を行いました。

また、乳幼児・子どもの託児サービスを実施しながら、ママたちへは助産師、保育士、民生委員による育児不安や悩み等の相談やカウンセリング、心のケアを行い、月に数回の母と子の癒しサロンで「孤立させない」「不安や悩みを共有」する機会を作りました。

活動実績

- ・ 天応地区／計16回
 - ・ 安浦地区／計4回
- 全20回の母と子の癒し交流サロンに延べ442人が参加

参加者のコメント (愛媛県宇和島市：母と子の癒し交流サロンより)

出産を終え、退院して2日後に災害が起きた。断水によりトイレを我慢したり、体もベトベト。さらに、産後の出血も続いていて大変だった。ミルクを作るのに、水がない生活は大変だった。
(4歳、3歳、2カ月児母)

自分はたまたま市外の実家に里帰りしていた時に災害が起こり、それから1カ月半実家で過ごすも、その間、家族がバラバラだった。帰ってからも、自宅の被害はない(みかん畑は被害あり)が、近所は被害を受けているところが多く、「自分のところだけ助かってしまった」という申し訳なさや、被災地でありながらも被災していない、苦勞を味わっていないことへの罪悪感に押しつぶされそうになる。
(1歳児母)

家やみかん用倉庫など全てが土砂崩れにより再建不可。土砂崩れ時は2階にいたが、土砂崩れと冠水にはさまれ、2階から降りれず逃げられず、恐怖と不安でしかなかった。2カ月の間避難所の生活だったが、子連れということ、他者との生活によるストレスのため、集会所や公民館を点々と回った。昨日、仮設住宅への入居を終え、2年間過ごすことに決めている。
何が大変だったかという、全部が大変だった。
(4歳、1歳児母)

ママたちを元気にするイベント

活動期間 2018年12月～2019年9月

活動目的 長引く被災生活のために心身ともに疲弊したママたちの
ストレスを軽減し、元気づける

対象地域 愛媛県、広島県、岡山県

支援対象 被災地の母子

連携団体・機関

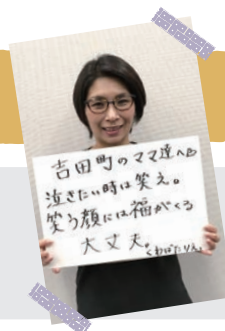
- ・宇和島市母子支援NPO「おかあさんといっしょ」
- ・呉市母子支援団体「子どもおたすけ隊」
- ・呉市母子支援団体「安浦こどもひろば たけちまる」
- ・岡山県災害支援団体「いのりんジャパン」母子支援部
- ・NPO法人ファザリング・ジャパン中国
- ・一般社団法人パパフレンド協会
- ・愛媛助産師会
- ・岡山県助産師会

「くわばたりえさんMom meets Mom」トークプログラム

愛媛助産師会主催「頑張ろう南予!さんばフェスタin宇和」内で開催



開催日時 2018年12月2日13:00～16:00 (トークプログラムは14:00～15:00)
開催場所 愛媛県歴史文化博物館(愛媛県西予市)
参加者数 母子を含む被災地域のみなさん200人
連携団体 愛媛助産師会、宇和島市母子支援NPO「おかあさんといっしょ」



愛媛助産師会主催により開催された「さんばフェスタin宇和」にて、I LADY.アクティビストのくわばたりえさんをゲストに迎えたトークプログラムを行いました。

3児のママとしても奮闘中のくわばたさん。自身の子育てで経験をふまえたエピソードなどで会場は爆笑と笑顔に包まれ、時には涙がほろりとこぼれる場面も。トークの中ではくわばた流子育ての極意の数々の紹介があり、ママの笑顔のためにパパにしてみもらいたいこと、そして、被災地で頑張るママへのメッセージが贈られました。

くわばたさんのエールは、被災地のママたちのハートに(パパたちのハートにも)しっかりと届き、被災地域のみなさんにとって記憶に残るイベントになったと思います。トークプログラムに先立ち、土砂災害の被害が大きかった宇和島市吉田町のママたちとくわばたさんとの交流の時間も持ちました。



「MOM meets MOM くわばたりえさんトーク&交流会」

開催日時 2019年9月29日

開催場所 まびシェア(岡山県倉敷市真備町)

参加者数 33人

連携団体 岡山県助産師会

真備町ではほとんどの住宅の1階部分が水に浸かり、1年以上たってもまだ修復されていない家屋がみられる状況でした。児童館のある真備保健福祉会館はようやく修復されましたが、大人数を収容できる会館などはなかったため、イベントは「まびシェア」で実施しました。



くわばたさんが笑いを交えてご自身の子育ての体験談を話すと、会場のママたちは共感しながらうなずいていました。「子育てをしていると、イライラしてノイローゼ気味になり、『なぜこの子は!』と思ってしまう。そんな時のことほど不思議と記憶に残っている、そういう思い出は振り返ると懐かしいし、心に響くもの。だから子どもがぐずったり、困らせたりと感じたときには『この子は記憶の親孝行をしている』と思えばいい…」と涙ながらに語ったくわばたさんの言葉には、会場のあちこちで涙をぬぐう姿が見られました。助産師によるアロマハンドマッサージもあり、参加したママたち、子どもたちは皆笑顔で会場を後にしました。



「敦子さんMom meets Mom in Hiroshima」トーク&交流会

「やすうらこどものあそびば」内で開催

- 開催日時 2018年12月2日13:30～16:00(トーク等関連プログラムは13:30～15:45)
- 開催場所 安浦まちづくりセンター三津口分館(広島県呉市安浦町)
- 参加者数 30人
- 連携団体 NPO法人ファザーリング・ジャパン中国、一般社団法人パパフレンド協会、呉市母子支援団体「子どもおたすけ隊」、「安浦こどもひろば たけちまる」



NPO法人ファザーリング・ジャパン中国、一般社団法人パパフレンド協会、ジョイセフの主催により開催した「やすうらこどものあそびば」にて、被災したママや子どもたち、そしてその家族も1日楽しめるイベントを実施しました。会場では、巨大迷路や木の積み木、プラレールに大人も子どもも熱中。ジョイセフは、被災後、自分のことを後回しにし、家族のことを優先して頑張っているママたちに、「少しでも自分と向き合う時間や自分のための時間を過ごしてほしい」という思いから、資生堂ジャパン株式会社の協賛により「元気になるメイクアップセミナー」を実施しました。

その後、メイクでリフレッシュしたママたちに向けて、ゲストにI LADY.アクティビストでもあるモデルの敦子さんを迎え、トーク&交流会を開催。5人の子育てだけでなく、モデル業をしながら助産師を目指している敦子さんが、「子育てしながら社会参加すること」「ママでも挑戦すること」について話しました。自分自身が一番に楽しむことが、子育てにおいても最も大事だと敦子さんの言葉に、涙を流すママたちもいました。



「ホワイトリボンラン2019」&関連イベントの開催

- 開催日時 2019年3月2日
- 開催場所 倉敷市真備町(岡山県)、東広島運動公園(広島県)、宇和島市丸山公園陸上競技場(ガイヤスタジアム/愛媛県)
- 参加者数 137人(母子を含むラン参加者)+100人(大島さん、ユカイさんライブ参加者)



岡山拠点ラン+大島花子さん&笹子重治さんライブ

連携団体 ラン/倉敷市、岡山県助産師会、岡山県災害支援団体「いのりんジャパン」母子支援部
ライブ/大島花子さんライブ、岡山県助産師会

倉敷市真備町から世界の女性たちにエールを送るホワイトリボンラン2019の岡山拠点ランを行い、母子を含む33人が参加。ランの後には、路上にまだ散乱していた細かい廃棄物を拾うボランティア作業を、地域のNPO「いのりんジャパン」と一緒に行いました。午後は、総社市のきよね夢テラスで「大島花子さん&笹子重治さん」ライブを開催。被災地で頑張るママたちに心を休めてほしいと、岡山県助産師会と一緒に企画し、お二人の協力を得て実現したイベントでした。

愛媛拠点ラン

連携団体 愛媛助産師会、宇和島市母子支援NPO「おかあさんといっしょ」

吉田町をはじめ西日本豪雨で被災した地域から参加したママと子どもたちを含む54人のランナーが宇和島市丸山公園陸上競技場(ガイヤスタジアム)に集まりました。マランナーの中には、今回のイベントにボランティアとしても協力してくださった助産師に赤ちゃんを取り上げてもらったママたちもいて、再会を懐かしみ、子どもの成長を喜び合う光景も見られました。



広島拠点ラン+ダイヤモンド☆ユカイさんトーク&ライブ

西日本豪雨による被害が大きかった東広島において、ホワイトリボンラン広島実行委員会が主催した広島拠点ランに、I LADY. アクティビストのダイヤモンド☆ユカイさんが、前年の熊本での参加に続き、参加してくれました。東広島運動公園に集合した参加者は約50名、なごやかな雰囲気の中、みんなで楽しく走りました。ランの後には、ユカイさんとジョイセフスタッフによるトークセッションやユカイさんによるライブが開催されました。

I LADY.ピアアクティビスト養成研修ほか

活動期間 2019年2月、3月、9月

活動目的 ジョイセフの被災者支援活動の経験から、被災地での性被害の予防をはじめ、防災減災に役立つ知識や学びを被災地の人々と共有する。

対象地域 広島県、愛媛県

支援対象 I LADY.ピアアクティビスト養成研修 17人
講演会等参加者 86人

連携団体・機関

- ・広島県男女共同参画センター(ゆいばと)
- ・松山市男女共同参画推進センター(COMS)
- ・NPOピアリンクinえひめ
- ・特定非営利活動法人えひめグローバルネットワーク
- ・特定非営利活動法人えひめリソースセンター

I LADY.ピアアクティビスト養成研修



女性をはじめすべての人の命と健康を守るために世界で提唱されている「セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ(SRHR)」について知り、恋愛や妊娠、産む、産まないの選択

など、自分の人生を自分らしく決められるように、ジョイセフが展開するI LADY. (自分を大切にし(Love)、自分で行動し(Act)、自分で決める(Decide))の取り組みとして、広島県と愛媛県の被災地において、I LADY.ピアアクティビスト(※)養成研修を実施しました。災害時には、日常から存在する差別などが増大し、性暴力なども増えるとも言われており、避難所等での被災生活で性暴力の二次災害にあうことがないようにするためにも、嫌なことは嫌と言えるように行動していく必要があることなどを紹介しました。

開催日時 2019年2月3日、3月20日、9月8日

共催団体 ピアリンクinえひめ、広島県男女共同参画センターゆいばと

参加者数 計17人

(※)ピア・アクティビスト=I LADY.のコンセプトを同世代や後輩などに幅広く伝え、日本のSRHRの状況に気づきかけを作る活動を担う。

性被害防止啓発ポスターの活用と提供



初動調査時の各県の男女共同参画センターでの聞き取りを通じて、被災地域での性暴力などの二次災害の有無について確認しました。

避難所などにおける性暴力被害防止の取り組みとして、ジョイセフが熊本地震被災者支援活動の際に熊本市男女共同参画センターと共同制作した啓発ポスターを愛媛県男女共同参画センターに提供し、宇和島市の被災地域の避難所で活用してもらいました。また、熊本県の男女共同参画センターから岡山県に対して啓発ポスターがいち早く共有され、岡山県倉敷市の避難所でも活用されていました。

ジョイセフの被災者支援の経験をシェア

1 母と子に寄り添う避難生活支援 ～豪雨災害支援から学ぶ、今できること～

日時 2019年2月2日(土)

場所 コムズ4階視聴覚室

参加者 20名

主催 NPOピアリンクinえひめ

愛媛県松山市で松山市男女共同参画推進センター「COMS(コムズ)」が主催するCOMSフェスティバルの中で、「母と子に寄り添う避難生活支援」というテーマの分科会が「ピアリンクinえひめ」主催で開催されました。ジョイセフスタッフが登壇し、東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨の被災女性・母子支援で経験したこと、課題、学びなどを共有しました。

2 日頃から備えておくこと ～西日本豪雨・熊本・東日本大震災から学ぶ～



日時 2019年9月7日(土)

場所 コムズ4階視聴覚室

参加者 44名

主催 松山市男女共同参画推進センター(COMS)

ジョイセフの東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨災害での女性・母子支援活動の経験をふまえて、将来の災害に備えて、特に女性が日ごろから備えておくべき知識や心構えについて、講演とワークショップを行いました。

3 女性の立場やジェンダーの視点について、改めて考える

日時 2019年9月8日(日)

場所 バフィオウわじま生涯学習センター1階練習室

参加者 22名

主催 特定非営利活動法人えひめグローバルネットワーク、えひめリソースセンター

講演会「南予地域で子どもを育てる」において、ジョイセフスタッフが登壇し、特に子育てとジェンダーの観点から、ジョイセフの被災地での女性・母子支援活動の経験を共有しました。

防災ラジオへの出演



防災の日に合わせて2018年9月3日(月)にNHKラジオで「災害と女性支援」が放送されました。ジョイセフと関係のある岡山県と愛媛県、そして熊本県の助産師やママグループとも中継でつながり、被災の状況や支援活動について共有が行われました。

被災地のママへのアンケート

西日本豪雨災害の発生から1年を機に、被災地に在住のママを対象に災害時を振り返るアンケートを実施しました。

アンケート概要

実施期間 2019年5月17日～6月20日

実施方法 被災地の助産師会および母子支援NPOのネットワークを通じて協力を呼びかけ、インターネット(携帯電話モバイルサイト、PC)で回答

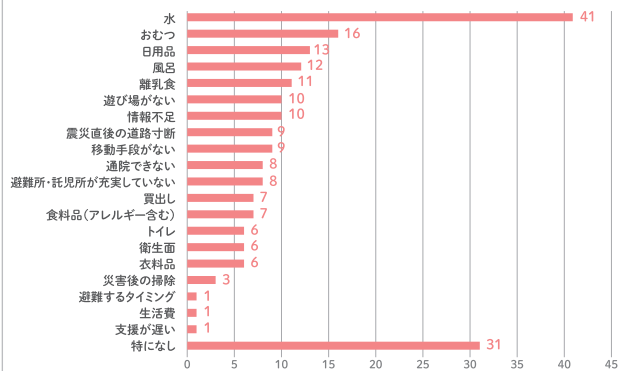
対象地域 岡山県、広島県、愛媛県の被災地

実施目的 災害を振り返り、今後、大規模災害が発生した際の母子支援活動に役立てる。

回答数 被災地に居住する母親計173人
(岡山県42人、広島県68人、愛媛県63人)

※173人の母親からの回答は、必ずしも被災地のすべての母親の状況を反映するものではありません。

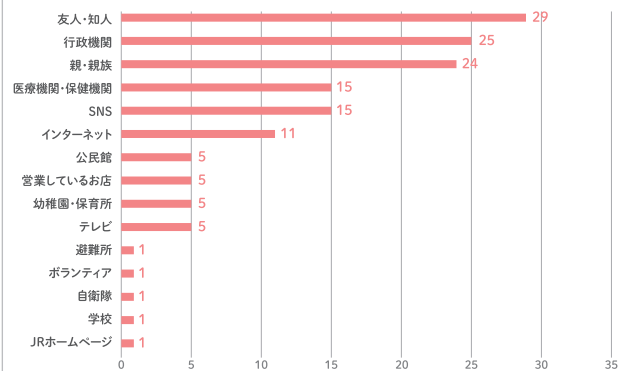
母子に必要な生活用品や情報、サービスや支援に関して困ったこと



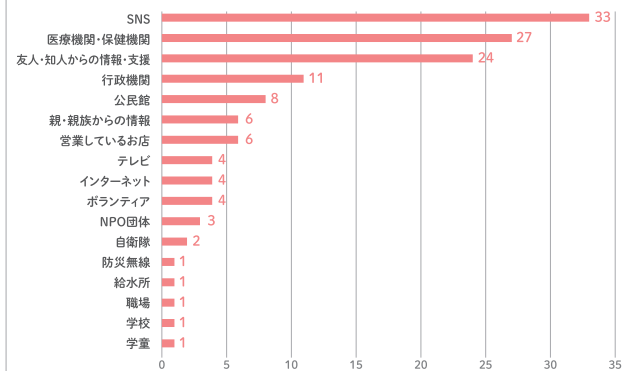
質問内容

- Q1. 災害が発生した時のあなたの年齢を選択してください。
- Q2. 災害が発生した時のお子様の人数を教えてください。
- Q3. 災害が発生した時のお子様の年齢を選択してください。
- Q4. 災害発生直後から2カ月くらいまでの期間に住む場所が変わりましたか？
- Q5. 災害発生直後から半年くらいの間で、母子に必要な生活用品や情報、サービスや支援に関して「困ったこと」について教えてください。
- Q6. 「困ったこと」について、最初にどこに(誰に)情報や支援を得ようとコンタクトしましたか？
- Q7. 「困ったこと」について、情報や支援を得るために実際に役立った場所・人について教えてください。

最初にどこに(誰に)情報や支援を得ようとコンタクトしましたか？



情報や支援を得るために実際に役立った場所・人について教えてください



アンケート結果のポイント

1. 災害の被害を受けて、約4人に1人(173人中、48人)のママが自宅を追われ、実家や避難所に住居を変えねばならなかった。
2. 最も困ったことは「水」、次いで「おむつ」「日用品」「風呂」「離乳食」「遊び場がない」など、子どもや家族の生活に関わる内容が上位を占めた。断水に伴うさまざまな問題や、道路の寸断や車が流されたことにより被災生活がさらに困難になったことを回答したママが多かった。不足し困った日用品には、お尻ふき、乳児用ミルク(液体ミルクを含む)、ベビー用品、薬、電池、ウェットシート、ウェットティッシュ、ティッシュ、トイレトペーパー、シャンプー、石鹸、台所用品などが挙げられた。水が入手できなかったこととの関連性が連想される日用品が回答の一定割合を占めた。
3. 情報や支援を得ようとコンタクトした先は、友人・知人や親、行政機関、SNS、インターネットが上位を占めた一方で、実際に最も役立ったのはSNSで、次いで医療機関・保健機関、友人・知人、行政機関、公民館、親であった。SNSで情報を求めた回答者の約半数はLINEを利用。ママグループのLINEの利用者が多く、母子愛育会や保育園のLINEグループに情報を求めたという回答もあった。

アンケートの結果から

被災地に住むママたちが、豪雨により発生したさまざまな問題に直面し非常に困難な生活を強いられたことが、多数の回答を通じて確認できました。また、情報や支援を求めた先と実際に役立った場所・人が必ずしも一致しなかったことも分かりました。ジョイセフでは、今回のアンケート結果を参考に、災害発生時に母子が必要とする支援をいち早く届けられるように、企業・団体と連携した物資支援の連携体制を平時より強化していくとともに、災害発生後に、SNSや母子支援NPOや関連機関・団体などとのつながりを通して速やかに情報を発信できる仕組みづくりに注力していきます。

被災地の経験共有会

開催日時

2019年11月23日

開催場所

えひめ共済会館

参加人数

27人



東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨災害の各被災地で女性と母子を支える活動に取り組んできた方々を招き、その経験を共有する会を開催しました。第一部、第二部では、保健師や助産師、そしてママグループから支援の内容や活動を通して得た教訓が発表され、そこでは保健師・助産師から右記のような気づきが発表されました。ママグループからは、支援活動の中で感じたことだけでなく、その経験をふまえた現在の活動についても発表があり、ママたちの力強さに感嘆する時間となりました。

経験共有会の
報告冊子を
制作しました。



ダウンロードはこちら

<https://www.joicfp.or.jp/jpn/2020/03/02/45377/>

経験共有会WEB報告はこちら

<https://www.joicfp.or.jp/jpn/2019/12/03/44543/>

保健師・助産師が災害発生後の母子支援活動を通して感じたこと

- 被災した人が早く日常に戻るための、継続支援を
- 心のケアを中心に、健康で安心して暮らせるまちを目指す
- 被災母子支援事業を通して学んだことを防災マニュアルに
- 開業助産師を多地域に配置して、行政との連携を
- 母子支援の情報発信に注力し、今後のフォローアップ体制も構築
- 万が一のために台帳は二重管理。出産直後のケアにも備えを
- 被災の種類に合わせ、最適な支援方法を学びたい
- 開業助産師は自らも辛いなか、災害時の母子支援をしてきた
- 自分やスタッフが被災すると、地域のママに寄り添えない
- 初動の遅れと連携不足のない体制の構築が必要
- 母子安否確認の仕組みを、反省を生かして構築
- 地域に根付いたグループと、しっかり連携を取る必要がある

経験共有会に続いて、専門家とママグループに分かれてディスカッションを行いました。保健師・助産師の専門家グループは、「連携」を何よりも大切だと感じたそうです。災害時の母子支援では、ママや子どもが安全・安心であるように、専門家は活動します。個々のスキルはもちろんですが、それを活かすためにも、専門家同士やママグループとのつながり、また地域の行政や医療機関、自治会、それに家族間や当事者と支援者といった多角的な連携体制をつくっておくことが、これからの災害時の母子支援には欠かせない視点であるとのことでした。そこで重要なのは、「つながりは、生きていくうえで一番コアになる部分である」という共通認識。それぞれの連携を強くしていけるようなつながり方を、日常から模索しておくべきという声が多く上がりました。さらに、心がけておきたいのは、日ごろからニーズを把握しておくこと、専門家として何ができるかをママに知っておいてもらうこと。発信力を専門家が高めていくこと、そのために今できていること、これからやろうとしていることの正確な把握も、3つの災害を通して見えた、今後のための大切なポイントでした。

ママグループの声

■ 日ごろから、どう生きるかを考えておく

ママグループや家族の間で普段から防災について話をしておく、協力体制がつくれるなど、話すことそのものが対策になっていく

■ 自分たちができることを考えておく

日常生活に何を取り入れておけば災害時に役立つのか、必要なサポートは？と考えておけば、日々の生活が防災につながる

■ 自分たちがしてもらったことを次のママにつなげる

災害時に困ったことや受けた支援を情報として多くのママと共有できれば、先を見据えた備えにつながっていくはず

■ 多世代が関わるきっかけづくり

楽しいことは幅広い年齢で共有していく場が重要。またおじいちゃん、おばあちゃんがいることのメリットを発信していくことも必要

■ 伝えること、知ること、行動すること

助産師など専門家の支援情報のほか、ママに役立つ情報を知ること、子どもを守ることにつながる。情報収集のための行動を起こす

■ 助けを求める力

支援してもらっているからと遠慮するのではなく、我慢しないこと。ママ同士が助け合うためにも、困っていることがあれば声に出す

■ やさしい好奇心

防災や連携の活動の中心に「やさしさ」を置くと、助け合いがもっとできるようになるし、自分にできることを考えるきっかけにもなる

ほかにこんな声が上がりました

■ 地域で子育て世代とつながる

■ ママが集まる場所に出て行く

■ コミュニティを活用

■ 役割を持つことで自己を肯定できる

専門家の声

■ 地域のつながりを大切にする

連携が何より必要だが、そのためには地域のことを日ごろから知っていなければならない。知っているのと専門知識を発揮できる

■ 防災力を高めるように発信していく

助産師として何ができるかを日ごろから発信していくだけでなく、地域の防災力を高めることにつながる情報の発信も必要

■ 支援者への心のケアを忘れない

みんなが疲弊している中で支援は、支援者が自身のケアを忘れがち。セルフケアも含め、支援者の心を大事にしていかなければならない

■ 災害時のネットワークづくり

助産師が地域の医療機関と連携できていれば、母子に万が一の事があったときも速やかに医療へつないでいける。密な関係構築を

■ 命を守る行動を意識する

日常生活が防災につながっているという感覚を持っていないと、いざ被災したときに動けないのではないかな。日常的な防災の意識が必要

■ 地域力、家族力をつける

助産師や子育てサークルのつながりを活用して支援をはじめ、家族の持っている力を信じて、家族力を強くしていけるような支援を

■ 地域、関係機関との連携

顔と顔が見えるつながりがあれば、災害時の母子支援でもっといろんなことができたはず。地域同士、専門家同士、町内会などとも連携を

ほかにこんな声が上がりました

■ 母子の安否確認の仕組みづくり

■ 情報収集の手助け

■ 母親、女性の心を癒すサポート

■ 生きる力を育てる

ママグループでは、「自分たちは何に備えるべきか」が大きなテーマとなりました。重要なのは被災者自身が力を付けること。そのためには日ごろから、家族間の協力体勢やママグループ内の連携はもちろん、どう生きるか、万が一の際にどう対応するかを考えておく必要があることが、みなさんの共通認識だったようです。連携ができていると、例えば避難所の状況やママ同士で助け合える情報などが多くのママに伝わります。その際は発信力の高いママの力を借りて、より多くの人に情報を伝えることも効果的だという意見がありました。情報が届けば、それが助けを求める力や自分や家族を守る力につながっていくのです。そこでポイントとなるのは「やった方がいいと思ったらやってみる」こと。将来の災害のために役立つと思ったことを、ママたちが率先して動くことが、つながりの構築だけでなく、備えにもなります。また、ママの間で保健師・助産師に聞きたいことリストを作成し、保健師・助産師は話したいことリストを作成しておくことが大切だとの声も。さらに、それをすり合わせるコーディネーターがいれば、双方のつながりがグッと深められ、災害時に孤立する母子を減らすことにもつながるのではないかと考えられます。



将来の災害に備えて

日を追うごとに拡大していく西日本豪雨による被害状況をふまえ、ジョイセフは2018年7月下旬に岡山県、広島県、愛媛県の被災地に入り、初動調査を開始しました。愛媛県で特に被害が大きかった宇和島市吉田町を訪問した際に出会ったのが、地元で子育てで支援の活動を行っていたNPO「おかあさんといっしょ」の泉恵さんです。

泉さん自身も被災者でした。しかし、保育士として保育園での勤務も続けながら、地域の企業を巻き込み、支援物資の提供や物資の保管場所の協力を呼びかけ、さらには、支援

物資の仕分けと配送の協力やボランティアの受付も行い、被災地のママたちをはじめ必要としている人々へ物資を届けるために、懸命に頑張っていました。



写真前列右端が泉恵さん

配付先には、保育園や小学校などの施設のほか、吉田町など自治体も含まれます。土砂崩れで道路が寸断された地域には、船で運んでくれる人を探し出し、物資を届けました。必要な物資や配付場所のやりとり、情報発信にはSNSを活用し、「おかあさんといっしょ」のLINEグループは、災害発生前の150人から災害発生後には243人へと参加人数が増加したそうです。

まだまだ物資が必要と聞き、ジョイセフは、「おかあさんといっしょ」が主催したイベントへ支援物資を提供しました。9月に入ってから、長引く被災生活でママたちが心身ともに疲れ果ててきていることを聞き、ジョイセフのこれまでの経験から、不安や悩みを抱えた母親同士が交流できる場としての母と子の癒し交流サロンの開催を提案し、吉田町をはじめとして、広島県、岡山県でも、地元のママグループや助産師の協力をいただきながら、同様の活動を始めました。

被災地の母子がどのような状況に置かれ、どのような支援が求められているかについて、一番分かっているのは、被災者であると同時に支援の担い手ともなるママたちです。ジョイセフができることは、ママたちが必要としているもの・ことについて聞き、被災地のママグループ、そして母子へと支援を「つなげる」ことです。

同時に、災害時のママへの負担を軽減できるように、「ジェンダーの視点」に立ち活動していくこと。困難な被災生活の中、ママたちは、心身をすり減らしながら、育児・子育てや家族のケアに加え、被害を受けた家屋の片づけも行っていました。父親を含めた家族や地域でママたちを支えていける環境を、災害時のみならず、ふだんから作っていくことが大切になります。

ジョイセフは、西日本豪雨災害被災者支援活動の経験を活かし、これからも、ジョイセフだからこそできる活動に努めてまいります。支援活動の実施にあたりご協力くださった、岡山県、広島県、愛媛県の被災地で女性と母子を支える活動に携わるみなさま、活動を支えてくださった企業や団体、個人のみなさまのご支援に、あらためて感謝申し上げます。

ジョイセフ西日本豪雨被災者支援チーム

ご寄附あるいは物資のご支援をいただいた
企業・団体等のみなさまの一部をご紹介します。
みなさまの温かいご支援にあらためて感謝申し上げます。

寄附金・助成金をいただいた企業・団体等(五十音順、敬称略)

株式会社銀座千疋屋	公益財団法人ベネッセこども基金
SING LIKE TALKING 佐藤竹善	株式会社ボンイマージュ
資生堂ジャパン株式会社	ロコ・ソラーレ 藤澤五月
特定非営利活動法人 ジャパン・プラットフォーム(JPF)	ヤフー株式会社(Yahoo!ネット募金)
株式会社 千趣会	
株式会社千疋屋総本店	被災女性支援チャリティーピンキーリング購入者
株式会社ダッドウェイ	および179名の個人支援者
ブルデンシャル生命保険株式会社	

物資をご支援いただいた企業・団体(五十音順)

被災地スマイルプロジェクト

アサヒグループ食品株式会社	大衛株式会社
アスクル株式会社	株式会社たかくら新産業
アスト株式会社	株式会社ダッドウェイ
イオントップバリュ株式会社	株式会社ナチュラルサイエンス
サラヤ株式会社	ピエール ファーブル デルモ・コスメティック ジャパン株式会社
株式会社ルートート	株式会社ヤクルト本社／愛媛南部ヤクルト販売株式会社

その他寄贈物資

株式会社ヴェレダ・ジャパン
Aden&Anais株式会社
資生堂ジャパン株式会社

西日本豪雨被災女性・母子支援 収支報告

寄附金・助成金による事業活動収入

計12,539,882円

- 支出内容 -

被災した女性・母子への物資支援	481,250円	被災地の母親へのアンケート	333,525円
助産師の活動(訪問活動・サロン)	1,165,777円	国内災害被災地の経験共有会ほか	1,982,733円
ママグループと連携した活動	1,962,539円	広報・報告活動	1,710,112円
ママを元気にするイベント	2,163,950円	初動調査(JPF助成事業)	1,039,333円
I LADY.ピアアクティビスト養成研修ほか	550,608円	業務管理費	1,150,055円

支出計 12,539,882円



活動レポートのイラストは、被災地宇和島市出身の絵本作家／イラストレーターのありま三なこさんに制作していただきました。



ジョイセフ
JOICFP

世界の妊産婦と女性を守る
公益財団法人 ジョイセフ

西日本豪雨災害 被災者支援 活動レポート

2020年5月1日発行
発行人：勝部 まゆみ

〒162-0843
東京都新宿区市谷田町1-10
保健会館新館
TEL 03-3268-5875
FAX 03-3235-9774

<https://www.joicfp.or.jp/jpn/>

※本書の一部または全部を無断で複写、転載引用することを固くお断りします。